

『公民館』一九六五年五月（全国公民館連絡協議会）

公民館活動と調査 《第四回》

矢口 新

解釈するといふこと

実際に調査の項目をたて、場合によっては調査票をつくるし、場合によっては調査票をつくらぬで調査をするが、そこまでは、どこに聴診器をあてるかということをかきめる操作であつて、ただ身体全体をなでまわすのではなく、この部分、この部分ということをはつきりさせることをやるのである。いわば分析ということなのである。

たとえば、公民館活動が非常にうまくいつている地域があるとす。そこを調査するといふような場合には、こういう点はどうか、こういうところはどうかなどというように、いろいろな点をさがすのである。そういう聴診器をあてる点は調査をする人が、それまでの経験からわり出すのである。そのことは前にいったが、さてそうして聴診器をあてたものをどうまとめるかが、つぎの問題である。

これは解釈ということであるが、つまり分析したものを総合的に考慮して、調査した対象の姿をそこに浮彫りにするのである。映画でいえばクローズアップである。調査はこれできまるといつてもよい。

医者が熱をはかつて高熱のとき、扁桃腺をみて赤くなっておれば、この二つの組合せから扁桃腺炎であると診断する。断定するのである。ただ熱をはかっただけでは、熱が高いとか低いとかという一つの事実をとらえたことにしかならない。他の現象と組み合わせ、熱の原因をさぐつて、そこで現在身体がどういう状態にあるかがわかるのである。

なんの調査であつてもこういう点、つまり事実の組み合わせによつて対象がどういう状態にあるかがはつきりするのである。

様々な現象—事実といつてもよい—を組み合わせるといつても、むやみやたらに組み合わせることはできない。医者が扁桃腺炎と

熱の高いのを組み合わせるのは、その間に相互の関連、原因と結果の関係があることを知っているからである。社会を対象として現象を調査した場合でも、この原因と結果の関係で組み合わせる考えるといふことは、医者の場合と同様である。公民館月報をよく読んでいふといふ事実と、読む人の学歴とを組み合わせる考えるといふのは、学歴がそれに関係ありといふ原因と結果の関係をあらかじめ知つていふからである。しかし、事實は必ずしも学歴の高い人が読まないかもしれない。学歴の高い人はもっと別なものを読んでいふかもしれないといふこともある。そうすると月報の内容がどういふものであるかといふことと関係があることになる。

こういうふうになると、調査をすること一つ一つについてあらかじめどんな関係があるかといふことをよく心得ていふこと、十分に考へていふことが必要になつてくる。つまりその人がもつていふ予備的な知識が重要な要素になるのである。解釈が妥当であるかどうかは、その点にかかつてくるともいえるのである。

解釈といふのは、事実と事実を組み合わせることでこれこれであるといふ判断をくだすことであるが、必要な事実が調査されていなければ、そうはできないわけである。必要な事実が

調査されるためには、あらかじめそのことが予想されていなくてはならない。事実がはっきりしない前に、そのことが予想されていなくてはならないというのは矛盾といえば矛盾である。これはなにかをやるうとする場合におかず、人間のもっている矛盾なのである。やらなければわからないが、わからなければやれない。こういうことはいつもあるわけである。

あらかじめこうであろう、こういう事実がこれこれの事実と関係があるであろうと予想することは、調査や研究の場合には仮説をたてるというようのである。この仮説を立てることが、調査を成り立たせるということもよいのである。仮説があるから、どの点とどの点を調査するかをきめるということもできるのである。最初に分析によって、聴診器をあてる場所をきめるということを行ったが、それも実はただむやみやたらにさがるのではなく、調査する人が、どれだけかのもつていながらそれをきめさせてくるのである。

にかかってくる。それはその人のこれまでの経験にもかかってくる。それが調査項目をきめる。だから調査はだれがやっても同じようにできるのでなく、人々によってことなるのだということになる。

調査項目をきめるという題のところをことういう点から、もう一度読み直していただきたい。あの場所で考えた調査項目をたてるための考え方の筋は、実は仮説にもとづいて考えるということなのである。

仮説と解釈

相撲はやってみなくてはわからないというけれども、調査も実はそうなのである。仮説は相撲の予想のようなものである。調査では仮説はきわめて重要であるが、しかも結局はやってみなければわからない。ということとは調査をやってみて、仮説がひっくりかえることもあるし、仮説のとおりになることもあるのである。きわめて大切なものであるけれども、仮説にとらわれないで考えるということだが、解釈の場合には大切なことになるのである。これも一見矛盾したようなことであるが、調査の解釈の場合には是非守らなくてはならぬことである。

公民館報をこれこれの人がよく利用し、これこれの人はあまり利用しないであろうと

いう仮説があると、それから利用する人、利用しない人の性質を調査しようという調査項目が立つてくる。これを質問紙の形で調査票にすれば、あなたは公民館を利用していますかという項目や、あなたの学歴はどうですかという項目や、あなたの職業はどうですかという項目が生まれてくる。そこには、学歴が関係あるであろうという仮説がある。もつといえ、読む階層というのは、学歴の比較的高い人であろう、低い人は利用しないかもしれないという考え方のすじがある。あるいは反対に比較的学歴の高い人が利用しないであろう、そうでない人が利用しているという予想があるかもしれない。それは公民館報がなにをねらってつくられているかということ、それとの関連でどういう性格で、どういう内容をどのように編集しているものかということと関連がある。できるだけ一般をねらっていても、編集する人の考え方によって、必ずしも一般むきでない場合もある。また、すべての人によまれるなどということは、新聞を除いてはなかなか実現しにくいことで、おのずから限界があるのである。

こういふさまざまな条件のところ、現実には、ある地域で公民館報が発行され読まれており、また読まれていないという事態が起こっているわけである。つまりある現象がそ

ここにあるというのは一言いかえれば、公民館報が出されて、それがある人には読まれ、ある人には読まれていないという実態があるということ―そこにさまざまな要因がからみあって、必然的にその実態が生まれていると考えるべきであろう。その必然的にある実態が生まれている、その姿を明らかにする、その筋道を明らかにすることが調査なのである。その筋道を、調査のはじめに当たって、予想するのが仮説をたてるということである。だから仮説は、こう出るかもしれないし、ああ出るかもしれないということが考えられる。それをできるだけ広く考えることが、よい調査を生み出すことになる。

というのは、世の中の実態は、そう簡単にきめられることでなく、深くさぐればさぐるほど、さまざまな要因があるのであって、それをさぐって、しかもこれをまとめるとき、真に実態が明らかになったというべきであろう。そこで仮説を立てるときに、それだけ深く広く考えることができれば、それに応じて実態が姿をあらわすということになるのである。

さて実際に調査をしてみて、その結果解釈をしてみる。われわれは仮説をたてているから、それに従って解釈をするのである。しかしその時にまた大切な心構えがある。それは

仮説であるから、仮説と全くことなった結果が出るかもしれないということである。これは一見矛盾のようである。仮説をたてるときは、自信をもって、あらゆる場合を考えてこれで万全であると考えて立てる。そうして、解釈をするときも、その線にのっとって解釈するのであるから、とかくそれにとらわれがちである。しかしそのときには、それもまた自分の考え方であって、世の中の真実はそれ以上にちがった側面を見せるかもしれない。その現実の姿に従うという態度が必要である。自分の予想どおりに世の中がなっていると考えすぎるのは甘いのである。その反対の場合の方が多いと覚悟すべきであって、そこでは、いつも謙譲に真実にしたがうという態度が大切なのである。しかしそういうためには、はじめに立てる仮説がどこまでも真実だという確信がなくてはならない。そこがあいまいであると、出てきたものがあいまいであり、それを世の中の真実だと考えると、大甘の調査になってしまう。

調査が生きるも死ぬも、最後の解釈にあるということがいわれている。せつかくよい事実をつかまえないながら、それを殺して使うことが多いといわれるが、それは、結局はじめの仮説の立て方、いわばどういふ筋道で事実の関係をつけるかの検討が甘いからである。

またせつかくよいねらいで調査をしながら、どうも具体的にடுத்த材料が不足で、はつきりわからないということもよくいわれるが、それもはじめのところ、仮説を厳密に立てて、これこれの筋道で考えるためには、どういふ材料が必要であるか、という検討が足りないからである。

さてこうなると、問題ははじめに帰ることになる。どういふ調査の問題をもち、それをどういふ筋で考え、そのためにはどういふ調査事項が必要かということを考え、それがどういふ条件で調査できるかを検討するところに、よい調査が成り立つのである。その他のことはそれを科学的、客観的なものにする技術であって、それは統計的方法であったり論理の問題であったりであるが、それ以前に大切なことは、調査者の調査に対する心構えということである。

—完—

> 国立教育研究所員<